

(続紙 1)

京都大学	博士 (経済学)	氏名	中野嘉彦
論文題目	マルクスの株式会社論と未来社会		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文はマルクスの株式会社論に、未来社会の可能性を拓く思想・理論を見いだせるのではないかという問題意識から、詳細に検討を加えたものである。</p> <p>マルクスはその著作の随所で株式会社にふれているが、体系的な展開を行ったわけではない。そこで申請者はマルクスの思想の基調を類的存在の概念とアソシアシオンの思想に見出し、こうした思想的基調の明確化との関連で、なぜ株式会社がマルクスの思想において重要な要素と見なしうるかを論証しようとする。</p> <p>こうして本書は次のような三章から構成されることになった。</p> <p>第1章 抽象的人間労働とは何か—類的存在とマルクスのアソシアシオン構想。 第2章 未来社会の通過点としてのマルクス株式会社論 第3章 初期アメリカのマサチューセッツ湾会社に見る「会社」の「社会」化の考察</p> <p>第1章では、マルクスの抽象的人間労働の概念がどのような経緯を経て成立してきたのか、それと類的存在、アソシアシオンの概念はどのような関係があるかを検討している。ルソー、ヘーゲル、フォイエルバッハ、プルードン、エンゲルスの関連する議論を取り上げ、さらにはエピクロスにも言及しつつ、類的共同労働と私的所有の矛盾に着目した点が一貫したマルクスの基礎視点であることを説いている。人間はゲマインヴェーゼンとして本来類的共同労働を行うのであって、それはアソシアシオンの労働というべきものである。しかし、私的所有のもとでは、類的活動が切断され、賃労働となり、労働は欲望充足手段になってしまう。疎外され、物象化された世界で人間は抽象的人間に転化してしまう。</p> <p>第2章では、そこからの解放はいかにして可能かをマルクスに即して検討している。「株式会社が未来社会への通過点となる」と述べたマルクスはアソシアシオン、人間の社会化を重視していた。未来社会は類的存在としての人間の疎外されざる活動が実現されねばならないが、その条件は資本主義の下で次第に準備されるというのがマルクスの認識であった。資本の社会化である株式会社は所有と経営の分離、資本家の消滅を帰結する。機械制が進むと労働は社会化され、管理労働となり、労働者は機械に従属する反面、経営も担うようになる。こうして資本主義の成果としての協業アソシアシオンは労働者の制御能力を高め、疎外の解消を可能とするとマルクスは展望していた。</p> <p>第3章では17世紀アメリカのマサチューセッツ湾会社が会社のままに社会となっていた55年の歴史を持っていることについて、会社がいかにして社会となりえたかを考察している。チャールズ1世の勅許状を得て出発した会社はピューリタンが契約神学に基づいて運営する経営体であった。(1)そこには領主的支配者はなく、(2)神の栄光を増すための禁欲と不断の勤労に勤しみ、(3)自由意志による勤労によって救済が得られるという確信をもった信徒が社員となっていたのであるが、(4)この会社は、株主総会のモデルで議事運営を行う制度を持っていた。以上の(1)から(4)の4つの特徴が会社の社会化を可能にした。会社はやがて世俗化の論理によ</p>			

て崩壊したが、独立革命後のアメリカにおいて先進国のイギリスにもまして早くに株式会社の発展を実現したことにはるかな影響を与えた。ニューイングランドのゼクテはアメリカの資本主義と民主主義の発展に影響を与えたのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、マルクスの株式会社論と、その根底にある思想としての、類的存在としての人間論、およびアソシアシオンの概念について、綿密な思想史的分析を行ったものとして、優れた成果であると言い得る。すなわち、本論文は社会経済分析ではない。経済理論分析でもない。むしろ、その中心は社会思想史への貢献であって、そのようなものとして価値があると言い得る。

マルクスの残したテキストは19世紀の資本主義の現実を前提にしているために、今では、時代遅れになっている分析も多いが、しかし、いまだに現代社会を把握するために参照に値する理論的、思想的遺産とみなしうるものも、たくさん存在している。

そのような認識に立脚して、労働疎外論、類的本質論、アソシアシオン論、再生産論や資本蓄積論、あるいは株式会社論などは繰り返し参照されてきた。恐慌論もそうである。本論文は、そのなかで類的本質、アソシアシオンの概念と株式会社の関連を可能性のあるものとして本格的に掘り起こした点に特徴がある。本論文の貢献をもう少し細かく述べると以下のとおりである。

第1の貢献は、マルクスが仄めかした程度にとどまるマルクスの株式会社論を、自らの労働者・経営者としての40年に及ぶ社会経験を踏まえて、彼の類的本質論、アソシアシオン論と関連付けて、暗黙のうちに籠められていたと推論しうるマルクスの将来社会像として、いわばマルクスに代わって、明示的に展開したことである。その社会像は、一見すると、社会化とか固体的所有の再建とか、社会的固体とかといった概念で抽象的に語られるだけに見えるが、全体としては自然の回復、社会の民主化、自由と平等の実現といった理念と結び付けられており、近代の価値を高次元に実現するものとして把握されている。それは再三、金融資本主義などの詐欺的・略奪的な振る舞いによって生み出された経済危機や自然・環境破壊などに苦しめられている現代資本主義社会への鋭い問題意識と関連しているが、評価されるのは、マルクス膨大なテキストから人類史の普遍的な発展論を取り出したこと、すなわち類的本質の再建と結び付けてアソシアシオンの展開として株式会社の持つポジティブな可能性を浮かび上がらせた点である。

第2の貢献は、抽象的人間労働というマルクスの概念を抽象的な労働として読むのではなく、抽象的人間の労働という具合に読むことによって、抽象的人間を作り出す制度として私有財産制度と資本主義を把握したことである。具体的有用労働と抽象的人間労働という概念対をマルクスは用いて使用価値と価値に対応させているから、申請者の読み方はマルクスの真意の正しい解釈かどうか疑問の余地がある。しかし、抽象的人間として人間が扱われてはならないという思想の表現としては考えさせるものを持っている。これはアレントが近代社会を否定するときに、圧倒的多数の人間が経済生活を営む生命（労働者）としてのみ生きることを余儀なくされている社会であるとし、人間の本質としての活動を疎外されていると主張する見解と通底するものである。マルクスとアレントの深い繋がりが浮かび上がっている。

第3の貢献は、申請者はマサチューセッツ会社の歴史を振りかえって、株式会社の原理の持つ可能性を明確に指摘したことである。ここでは多くは二次文献に依拠しているのではあるが、55年間会社としてコミュニティーを形成した事例に注目した。会社は宗教者の経営体であったから、やがて資本主義的利益追求が重きをなすようになった結果、解体する運命にあったが、しかしそのセクト（ゼクテ）が革命後の株式会社と民主主義の発展に与えた影響は無視できないものがあることを指摘

している。

こういった点での貢献は注目に値するが、しかし、本論文にはいくつかの弱点もある。

第1に、全体として思想史的分析に終わっていることが指摘できる。参照されている文献は市民社会論者（市民派）のものが中心で、アソシアシオンに関しても株式会社に関しても必読文献と思われるいくつかのものが参照されていない点に不満が残る。

第2に、株式会社論の議論がクリアではない。それは技術論分析がないことによると思われる。株式会社は歴史とともに古いという指摘もあるが、株式会社が本格的に発展するのは、大工業、巨大装置（固定資本）を必要とする段階に資本主義が到達したときである。また株式会社が将来社会の道具になるのは上場・株式公開があるからであって、現代でも情報公開と上場がリンクしていることに産業民主化の基礎があるのであって、その点にまで議論が及んでいない。

第3に、そのことは商品論をベースにした資本主義理解にとどまっていることに関連している。マルクス研究としては残された課題がたくさんあることを指摘せざるを得ない。

その他、ルソー解釈や私有財産の理解にも疑問の余地があるが、それは些細なことである。

こういった弱点があるけれども、このことは本論文の価値自体を否定するものではない。なお、平成23年1月20日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果合格と認めた。